

平成30年度「アクティブ・ラーニング推進事業」 一宮市の取組について

1. 事業の内容

(1) ねらい

- 学校教育における質の高い学びを実現するための授業改善として、市内教務主任の研修を通して「主体的」「対話的」「深い」学びの実現を目指すとともに、各校の子供に未来を拓く資質・能力を身に付けさせる。
- 新しい時代を生きる子供に必要な資質・能力の育成について、「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性の涵養」の各視点から、小中学校の現職教育を中心にアクティブ・ラーニングの実践研究を進める。

(2) 活動内容

- 教育委員会指導主事と一宮市小中学校教務主任による研究推進委員会を組織し、研究のねらいを踏まえ研究計画・方針を立案し、研究推進に当たる。
- 各校は、以下の研究方法にそって実践を行い、授業研究や一宮市教育研究集会、教務主任者会等で、研究の成果の還元をはかる。

(3) これまでの研究の取組

【6月6日】

教務主任者会「アクティブ・ラーニングの視点による学力向上推進研修会」

テーマ 新しい教育課程で実現する『主体的・対話的で深い学び』とは
<講義の内容>

アクティブ・ラーニングの授業理念

- ・能動的に学ぶことができる学習者（アクティブ・ラーナー）を育成すること。
- ・これからの授業は教える(teach)ことから学習者(Learner)の育成を意識すること。

今後の授業での学習法の転換



- ・教育現場に元来備わっていたアクティブ・ラーニングの素地を生かしていく。
 - ・子供の実態や生活（興味・関心、社会背景）から学びをつくる。
 - ・探究的な学びが確立、子供の考えや思いを醸し出していくような息の長い単元を構成する。
 - ・学び合いや高め合いを生むような話し合い授業を実施する。
- ・アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントを連動させて各学校の流儀を示していく「〇〇小中学校流のアクティブ・ラーニング」の研究を行う。
<研修を受けて>
- 1学期中に、授業改善を行うために、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた指導案を作成することを学校に指示した。

【8月6日】

夏季研修アクティブ・ラーニング講座

(2年目～10年目経験者への授業法研修)

愛知教育大学 加納 誠司 教授から学ぶ

テーマ アクティブ・ラーニングを実現する主体的・対話的で深い学び
＜講義の内容＞

主体的・対話的で深い学びの観点で自分の授業を価値づける

- ①個の考えを表出させるための手立て
 - ・主体的な学びの中で深い思慮に導くため、学びの主体性を子供に育み、学びの発動力を促す。
- ②対話的な学びを仕組むための手立て
授業構想のポイント
 - ・学習課題が学級全体で共有されているか。
 - ・子供の思考の流れをイメージし、学習の見通しをもって対立場面や支援場面をつくり出しているか。
- ③他の考えと比べるための手立て
 - ・協働してつくった学びの成果物として板書の中に自分の学びが存在していることがポイントである。
- ④更に思考を深めるための手立て
 - ・思考の枠組みを広げたり深めたりして学習したことを自分事として捉える。仲間との対話を通した後、再び自分自身との対話に返すことで学びは更に深まる。



※「自分ごと」にするプロセスが大切である

研修を受講した教員から各校で伝達講習を行い、2学期の研究へつなげる。

【講義を受けて】

- 本講座では、研究推進委員会での研究方針を参加者に直接伝え、アクティブ・ラーニングを意識した授業ができる教員を育成する研修を行った。

【9月11日】

教務主任者会「第1回アクティブ・ラーニング研究推進委員会」

愛知教育大学 加納 誠司 教授から学ぶ

テーマ 『主体的・対話的で深い学び』に導く授業デザイン

＜講義の内容＞

学びを深くするための授業デザイン

- ・教務主任が、アクティブ・ラーニングの授業理念を学校で価値づけて研究を進める。
 - ・教科について横断的な学びや、社会や地域、今起きていることの実事の学び、長いスパンでの学びを意識する。
 - ・アクティブ・ラーニングの定義を逆に読み、主体的・対話的に学べば、深い学びに達する。
 - ・主体的な学びを保証し、個の考えを表出させる。
「対話的な学び」を授業に位置付け、深い思考に導く。
 - ・「対話的な学び」の整理
→安易な「活動あって学びなし」にならないための授業計画をたてる。
- ① 対象（題材）と自分との対話で自分の考えをもつ。
 - ② 友達との対話で自分の考えを再構築させる。
※話合いは目的と効果を捉え「何のために（目的）」が大切。
 - ア 教えあい・尋ねあい・助けあい・見せあい
 - イ 認めあい・確かめあい・伝えあい・くっつけあい・比べあい



- ウ 広げあい・分かちあい
- エ 高めあい・ぶつかりあい

- ③ 教師との対話で学びの深化を図る。
- ④ 社会との対話で学びの手ごたえ感の獲得を図る。
 - ※友達と討論して広がった思考と個の思考が往還することで思考を深める。
 - ・個の思考を多面的・多角的に捉えることで思考が広がる。
 - ・個の思考を線で捉え、未来的・建設的に考えたり、思いをはせたりすることで思考が深まる。
 - ・単元を通して学び続けられるような授業構想をする。

【講義を受けて】

- 講師の指導と、1学期に実施したアクティブ・ラーニングを意識した授業の指導案をもとに、2学期に各校で実施する授業について研究を推進する。

【11月27日】

教務主任者会「第2回アクティブ・ラーニング研究推進委員会」

愛知教育大学 加納 誠司 教授から学ぶ

テーマ 『主体的・対話的な学び』から『深い学び』に達する授業とは
 <講義の内容>

「主体的・対話的で深い学び」の具体的な子供像、授業像を学校カリキュラムに位置付け、チーム学校、チーム一宮の共有財産とする。

◆学校の独自性をカリキュラムに具現化していく方法

①カリキュラムデザイン

- ・学校カリキュラムの核を定め授業をデザインする。子供の生活の実態から課題をつくり、教科横断的な視点で学びのプロセスを描く。



②PDCA サイクルをチームで確立

- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、学年単位ではなく学校単位でカリキュラムを組織し評価・改善を図る。

③地域一体となってチーム学校を実現

- ・地域の人的・物的資源を最大限に活用し効果的に組み合わせる。
 - ※カリキュラムを、担当学年、限られた教科という一つの枠組みで固定して考えるのではなく、子供の発達段階や教科の独自性、他教科への横断的なつながりなどを考慮し系統的・発展的に示す。

◆各教科固有の見方・考え方を働かせるためのカリキュラム・マネジメント

- ①学校カリキュラム全体の中で、その教科が果たす固有の役割を見極め、指導計画の中に具現化し共有化を図る。
- ②可能な限り教科間の横断化を図り、学校カリキュラムの総合化を図る。(ヨコのつながり)
 - ・探究的な学びを核とすることで学びは深まる。
 - ・教科を核として総合(探究)をうまく利用する。
 - ・教科の関連というより、融合を目指す。
- ③小学校6年、中学校3年の9年間で考え、学校カリキュラムをマネジメントする。(タテのつながり)

アクティブ・ラーニングの授業理念を明日の授業に生かすためには

〔教師の理念〕

- ・教えることから、能動的に学ぶことができる学習者（アクティブ・ラーナー）の育成を図る

〔子供の学ぶ力〕

- ・子供がもともとち合わせている力
- ・「教えてもらおうよりも、気付きたい」という学びへの思い

教師が、寄り添ったり、耳を傾けたり、目線を低くして見たりして、子供が学びに向かっている同じ方向を向いて、この教師の理念と子供の学ぶ力をどこまで信じていることができるかが大切である。

<講義を受けて>

- 本年度の講師の指導と、研究推進委員会が作成した〔別紙1〕アクティブ・ラーニング型授業（一宮モデル）をもとに、本年度各学校で取り組んだ実践についての考察を行い、実践報告書にまとめる。報告書は実践事例集として、全校に配付して活用を図る。第4回アクティブ・ラーニング研究推進委員会で良例を報告し、来年度の授業改善に活用する。

2. 事業の成果

(1) アクティブ・ラーニング型授業（一宮モデル）をもとに作成された実践報告書から

〔実践報告について各学校へ指示したこと〕

- ① 模範となる校内に広めたい実践について、指導案を提出する。
- ② 指導案は三つの授業のうち、1つは「導入」、1つは「展開」、1つは「まとめ」においてアクティブ・ラーニングの視点で作成し、「主体的・対話的な学び」「深い学び」のいずれか、又は複数の実践が記載されていること。
- ③ 提出する三つの指導案には、指導者のしかけの意図、授業後に実践時の児童生徒の様子を「校閲」－「コメントの挿入」で書き加える。これを実践報告書とする。

A 小学校の実践報告書

A小学校

個人活動もペア対話活動も問題解決の目標がある

問題解決型のしかけ = 主体的・対話的学習のしかけ

主体的

主体的

- ・子供に課題解決を目指す導入を意識させ、学習全体の見通しをもたせる。
- ・子供に設問と対話させ、まず個人で考えをもたせる。

対話的

- ・ペアで話し合いを行わせ、解決に向かう道筋を考えさせる。

B 中学校の実践報告書

B中学校

課題解決のための中学生の対話の工夫 広げあい・分かちあい

対話的な学びの例
ファシリテーション
ワールドカフェ
シンキングツール

主体的

主体的

- ・子供に課題解決を目指す授業の見通しを意識させる。

対話的

- ・ファシリテーターに、話し合いの整理をさせる。
- ・グループ内の話し合いを、シンキングツールで見える化する。
- ・ワールドカフェ方式の話し合いにより、幅広く意見を得て、自己の考えを再構築させる。

指導の意図、指導に対する子供の反応が可視化されることで、授業においてアクティブ・ラーニングのねらいを明確に示すことができ、他の指導者が実践報告を参考にして自分の授業を改善しやすくなった。

(2) 研究の成果

- 研究を始めた当初は、アクティブ・ラーニング（特に対話的な学習）が目的であるかのような考え方で授業を構成する誤解があったが、委員会で検討を重ね、教務主任の理解が深まったことで、学習指導要領の目標に達していない授業改善の手段としてアクティブ・ラーニング型授業を意識できるようになった。
- 深い学びを実現する授業の実施について、理解不足により教務主任から自校の授業者への働きかけが弱かったが、研修によりゴールイメージである学習指導要領の目標を達成することを具体的に意識した働きかけができるようになった。
- 本研究について、教務主任から各校の教員全体にアクティブ・ラーニング型の授業の実践を指示したので、市全体が研究の視点をもとに授業改善を考える契機になった。
- 話合いの価値付け（「あい」のある話合い）を行ったことにより、各教科の言語活動において、発達段階に合わせた系統的な友達との対話場面の設定を意識できるようになった。
- 課題解決的に学んだ子供は、学習意欲が高まり、更に学んで自己を高めたいという姿が見られた。アクティブ・ラーニング型の授業は、学びに向かう力を育成する契機になった。
- 学年や教科が広範囲になるように実践事例を収集したので、今後アクティブ・ラーニング型授業に取り組む教師の参考資料として実践事例集を有効に活用することができる。また、紙媒体に加えてDVDでも実践事例データ集を作成するので、ファイル名から教科や学年のデータを瞬時に検索することができ、今後の研究に有効に活用することができる。

3 今後の事業計画

課題の改善を目指して

- 新学習指導要領の示す目標をもとに「深い学び」のゴールイメージをもち、学習過程が「主体的・対話的」になるように、教師が教材を深く学ぶ必要がある。
- 教師と子供との対話が、子供同士の手本となるように、課題・問題解決を促す発問や切り返しの指導技術を更に磨く必要がある。
- 本研究で共有した情報をもとに、同教科の教員が連携を強めてチームで更なる授業改善の研究を進めることができるように組織を整備する必要がある。
- 学習指導要領の資質・能力の育成について、各教科の見方・考え方を生かして推進していく手段については今後の研究課題である。
- 今後も、キャリアステージに応じた研修を継続し、子供の学ぶ意欲を高める授業づくりを目指して、教員の力量向上を図っていく必要がある。